

「AI にしかできないこと」

— 2 稿 —

2026/9/25

〈人物表〉

高橋^{たかはし} 翔太^{しょうた}
(34)

丸バツ食品の社員

佐竹^{さたけ} 美香^{みか}
(28)

高橋の同僚で、後輩

加藤^{かとう} 浩輔^{こうすけ}
(43)

高橋の上司で課長

相田^{あいだ} 亮二^{りょうじ}
(40)

AI活用コンサル

本多^{ほんだ} 壮一^{そういち}
(67)

丸バツ食品の社長

北川^{きたがわ} 直人^{なおと}
(38)

トレーニングジムのオーナー

高橋の同僚らA・B

1. 丸バツ食品本社ビル・外観（朝）

いかにも大企業な高層ビル。「丸バツ食品」のロゴ。
加藤の声「高橋、お前の訴求ポイントはどこなんだよって」

2. 本社ビル・小会議室（朝）

こぢんまりした会議室。十名弱で会議中。
スクリーンには「新商品提案 高タンパクマツチヨ
向け冷凍弁当」の字と、写真や価格など投影。
プレゼン中の高橋翔太（34）、脂汗が止まらない。
課長・加藤浩輔（43）、資料を丸め、机を叩く。
加藤「一個千円って高過ぎだろ。ターゲットもニツチだし、ど
こ訴求なんだよって」

高橋「そ、そちらにつきましては……」

高橋、緊張のあまり過呼吸に。加藤、ため息。

加藤「またかお前、わざわざ時間取ってんのお……」

と、講釈を垂れ始める。

会議室内の他の面々、気まずそう。

ふと高橋、後輩の佐竹美香（28）と目が合う。

美香、そっと目を逸す。

高橋、必死に呼吸を整える。加藤の罵声。

高橋の胸ポケットには、ペン型の電子端末。

端末の赤いランプが点滅。高橋の息と、心音。

3. （回想）本社ビル・大ホール・入口（朝）

「Aーによる業務効率化説明会」の立札。

相田の声「今や人智を超えたと言われるAーにも弱点はあります」

4. （回想）本社ビル・大ホール（朝）

相田「それは、学習済みのことしか答えられないという点です」
壇上のAー活用コンサル・相田亮二（40）、社員
ら千人以上の前で、熱を込めスピーチ。

相田「例えば日々の会議や現場で何が話され、何が決まったの
か。そんなことすら知らないAーに、果たして私たちの
業務を任せられるでしょうか」

高橋、ポケットとした顔で聞いていたが、居眠り。

相田、先ほどのペン型端末を取り出す。赤く点滅。

相田 「そこで皆さんにAーの目となり耳となつてほしいのです」

モニター、相田の言葉が一字一句投影されていく。

全員にペン型端末が配られる。なんだこれという顔。

相田 「これはただのボイスレコーダーとは違います。気の利か

ないAーを今日から優秀な同僚へ変える、魔法の杖です」

社長・本多壮一（67）、後ろでその様子を眺める。

居眠り中の高橋、はっと目を覚まし端末を受け取る。

加藤の声 「訴求ポイントがねえつつってんだよ！」

5. 本社ビル・小会議室（朝）

加藤、資料を床に投げる。

高橋、必死に過呼吸を止めようとしている。

と、胸ポケットの端末がブブッと振動。

前の画面、Aーアプリ「アイちゃん」のアイコンが

表示。突如、「訴求ポイントは……」と文字が投影。

アイちゃん「（自動音声で）訴求ポイントは価格です」

加藤 「……あ？」

アイちゃん「既存商品と同じ分量で提供できれば一食二百円も安

く、十分な優位性があります。実現可能性も十分で……」

と、裏付け資料を次々投影。

会議室の面々、各自PCで確認。おおーっという声。

よく見れば全員の胸ポケットにも端末。点滅中。

加藤、思い出したかのようにポケットを漁り、自分

の端末を取り出す。

アイちゃん「市場規模も近年の筋トレブームにより、決してニッ

チとは言えません」

加藤 「……え？ あ、そうなの？」

加藤、PC画面を見ては、言うに事欠いて、

加藤 「……競合調査の数、少なえじゃん。ダメだろこれじゃ」

高橋 「た、大変申し訳——」

またペン型端末、ブブッと振動。

アイちゃん「競合調査を踏まえても問題なく……」

直ちに画面に調査結果が映し出される。

加藤、バツの悪い顔でしばらく画面を眺め、

加藤 「……まあ、いんじゃない」

高橋、咄嗟に頭を下げる。

6. 居酒屋・店内（夜）

美香ら会議室にいた数名で飲み会。

同僚A 「（相田のモノマネ）……魔法の杖なのです」

一同、大いに盛り上がる。加藤はいない。

美香 「でもホント、今までのAーがオモチャですよ」

同僚B 「今日から毎日定時上がりで飲み行けるねー」

テーブルの隅で高橋、控えめにビールを飲んでいる。

美香 「もー、初めて高橋さんの企画が通ったお祝いなんです」

高橋、話しかけれ、狼狽して、

高橋 「……ありがとう、佐竹さん」

美香 「いや奇跡ですよ。飲めればなんでもいんですけど」

高橋 「……ははは」

美香 「あ、私も商談同行することになったんで」

高橋 「……よろしく。頑張ろう、ね」

と、満更でもない顔。

美香 「商品化、頑張りましょうね」

高橋 「う、うん」

7. 本社ビル・オフィスフロア（昼）

高橋、同僚らを前に説明するが、言葉に詰まる。

ふと、課長席の加藤と目が合い、焦る。

と、胸ポケットの端末、ブブッと振動。

アイちゃん「つまりこういうことですね……」

と、説明スライドを生成して投影。

美香ら、うんうんと頷く。

高橋、落ち着きを取り戻し、説明を続ける。

× × ×

テーブルに並べられた試作品弁当の数々。

同僚ら、口々に「美味しい」など、反応は上々。

アイちゃん「私も食べたーい」

一同、ツツコむ。高橋も思わず笑う。

× × ×

高橋だけ居残り中。疲れているのか、眠そう。

高橋 「（端末に向かって）……プレゼン資料作っというて」

プレゼン用資料が生成。高橋、満足げ。

資料をめくる。「訴求ポイント」の字にハツとする。

ふと課長席を見てしまう。加藤はいない。安堵。

8.

トレーニングジム（昼）

ジムには、筋トレに励む人々。

その一角。テーブルに座るマツチヨ。ジムのオーナー

ー・北川直人（38）、真剣に資料を読んでいる。

北川 「……一食でタンパク質40グラムは優秀っすねー」

向かいの高橋と美香、うんうんと頷く。

高橋、勇気を振り絞り、画面のカンペ通りに棒読み。

高橋 「お、お客様ごと10グラム単位で調整可能となっております」

北川 「マジすか？ だってよ？」

と、右腕で力こぶを作り、話しかける。

美香 「……ハハハ」

高橋 「全国展開されている御社のジムとぜひ業務提携を——」

北川 「これ、G1値どんなもんすか」

高橋 「え？ ああ、ええと……」

北川 「あと油はオメガ3（スリー）すか、MCTすか？」

高橋、咄嗟に胸元の端末の点滅を見て、安堵。

が、ブブっと言わない。

PC画面。ネットが繋がっておらず、焦る。

北川 「やっぱそこなんすよねー。マツチヨへの訴求ポイントは」

高橋、ビクッと反応。過呼吸に。

北川 「え、大丈夫すか？」

美香 「高橋さん、高橋さん？」

9.

公園（夕方）

高橋、ベンチにしょんぼり腰掛ける。

美香、缶コーヒーを渡し、座る。

高橋 「ごめん、準備は完璧だったんだけどさ」

美香 「……え？」

高橋 「急に变なこと言ってくるから、焦っちゃってさ」

高橋、また過呼吸気味に。

美香、高橋に戸惑いつつ、

美香 「あのー、プレゼンの練習だったら、付き合いますよ？」

高橋 「でもさ、俺これ失敗できないんだよ」

美香 「まあ、それは大体の仕事そうっていうか……」

高橋 「え？」

美香 「あの、最近頑張ってるっしょいのは、一応見てる

ので。大丈夫です。ちゃんと準備すれば、きっと」

高橋 「……そう、かな」

美香 「……はい」

と、高橋の端末、ブブッと振動。

アイちゃん 「高橋さん、ファイトです」

高橋 「？」

アイちゃん 「あなたならきっとできます」

高橋 「……これで行けないかな」

美香 「……え？」

10.

本社ビル・オフィスフロア（朝）

出勤する高橋、ふと課長席を見る。

加藤、段ボールに荷物を詰めている。

社員A「（コンコンと）課長、人事に呼び出し喰らったんだって」

社員B「マジ？ え、誰かチクったの？ 誰？」

高橋、オフィスを出る加藤と鉢合わせ。

加藤、高橋に一瞥もくれず、出ていく。

高橋、啞然。立ち尽くす。

徐々に、ぎゅっと拳を握りしめる。

11.

本社ビル・オフィスフロア（昼）

課長席、加藤はいない。

高橋、満面の笑み。胸ポケットの端末。赤く点滅。

アイちゃん「訴求ポイントは50以下の低G値です」
PCでリモート会議中。相手は北川。
北川「(アイちゃんに困惑しつつ) えーと、油は？」
アイちゃん「もちろん、MCTオイルです」
横に座る美香、気まずそう。
画面の北川、戸惑いつつも、
北川「……じゃあ、全国展開、やっちゃいます？」
アイちゃん「ありがとうございます。ぜひ宜しく……」
高橋、思わず立ち上がって、喜ぶ。
高橋「け、契約決まりましたあ！」
オフィスの一同、立ち上がって拍手。
美香、苦笑い。

12. オシャレなバー（夜）

立食形式の打ち上げ。盛り上がる一同。
高橋、どこか蚊帳の外。
静かにグラスをぐっと飲み、恐る恐る、
高橋「佐竹さんさ」
と、輪の中心にいる美香に話しかける。
美香「……はい？」
高橋「本当に、ありがとね」
美香「あー、いえ、どういたしまして」
社員A「……え、なに？ なんかあったー？ 二人？」
美香「あははは」
と、誤魔化して、輪に戻る。
高橋「……」

13. 夜道（夜）

一同「お疲れしたー」
と、解散。
高橋、しれっと美香を追いかけて、
高橋「あ、あのさあ。よかったらもう一軒、どう？」
美香「高橋さん、今日は帰ったほうが」
と、かわそうとする。

高橋 「これさ、上手くいけば俺、課長になったりなんてさ」
美香 「え？ あります？」

高橋、ちよつとムツとなる。

美香 「……あの、ほんと無いです。高橋さんとは」

高橋 「あ、いや。仕事の話でもと思って——」

美香 「高橋さんと仕事の話って、何話すんですか？」

高橋 「……前よりは、できるようになったんだけど」

美香 「別にそれ、Ａーに全部任せてるだけじゃないですか」

高橋 「……は？」

美香、帰ろうとして、

美香 「おやすみなさい——」

高橋 「佐竹さんだってさ、見て見ぬふりしてたじゃんかよ」

美香 「え？」

高橋 「……忘れて、ないからな」

高橋、美香の腕を掴み、離さない。

抵抗する美香の声。

揉み合い、高橋、端末を落とす。赤く点滅。

14. 本社ビル・社長室・外観（朝）

本多の声「懲戒対象者が既にこんなに」

15. 本社ビル・社長室・内（朝）

本多の手元、「極秘」「懲戒対象者」と記した資料。
パラパラめくると、加藤の顔写真。

相田 「Ａーで業務効率化が進めば、問題になるのは暇な正社員の
人件費です」

本多 「……正社員は、なかなか減らせないからね」

本多、階下の出勤中の社員らを見下ろす。

本多 「よく考えましたねえ。本当、Ａーにしかできないことだ」
相田 「いえ、私はただ考えてもらっただけです」

相田の胸元には、端末。赤く点滅。
机に置かれた資料の一枚に、高橋の顔写真。

（終わり）